

◎演題 「地域密着型アートプロジェクトの課題とゆくえ  
—津奈木町の住民参画型アートプロジェクトの実践から—」

◎講師 楠本智郎 先生 つなぎ美術館学芸員

美術講演会は、一九七五年に坂崎乙郎氏により行われた第一回の講演会(現代絵画はどこへ行く)から数えて、今回が第二九回になります。東京や福岡などから画家・彫刻家・評論家などの先生方をお呼びして毎年開催して来たこの催しも、ひとまず閉じて来年度から新しい展開を考えています。記念すべき今回は、美術理論部門の委



員でもある楠本智郎先生にお願いしました。先生は福岡市のお生まれで、鹿児島大学大学院人文科学研究科修士課程修了。つなぎ美術館で学芸員として活躍しておられます。人口が五千人に満たない津奈木町が美術館を維持しているだけでも素晴らしいと思います。二〇一三年にはこれまでの活動が評価され「地域創造大賞(総務大臣賞)」を受賞。翌年には「アートプロジェクト」赤崎水曜日郵便局が「グッドデザイン賞」を受賞するなど、全国的に注目を浴びています。今回は、これまでの活動の内容を詳しく紹介いただくだけでなく、その成果や今後の課題についてもお話しいただきました。

大学の学部では美術専攻だったが、大学院では民俗学を専攻し民俗宗教史の研究をしていた。大学院を出て展示企画の事務所での活動、福岡市博物館の学芸アシスタントやタイの国立大学の講師などをを経て、二〇一一年から葦北郡津奈木町立のつなぎ美術館の学芸員として活動している。今日は、つなぎ美術館に勤務して自問自答を繰り返しながら体験してきた「地域密着型アートプロジェクト」を中心に紹介したい。

津奈木町は人口が現在では四九〇〇人になっていて、一次産業が中心の町。「水俣病からの再生」のために一九八四年から「緑と彫刻のあるまち」

を実施、作家の個展も行った。二〇一〇年には彫刻家の勝野眞言と地元の人を使う「大地のメモリア」、大学の先生なのでこの時は学生がたくさん来た。町にはいない年代の若者が来て、実行委員や住民はとも喜んで。次の年は海の上の小学校を舞台に今田淳子と「AKASAKI海想日誌」、この頃までは赤崎小学校の中心でワークショップを行うことができた。二〇一二年はデザイナーの松永壮と舞踏家の森下真樹で「TSUNAGIハートアート!パラダイス!」、熊本県立劇場とのコラボで美術デザインと舞台芸術を合体したプロジェクトになった。

二〇一三年に始まったのが「赤崎水曜日郵便局」。建物に入れたくなった赤崎小学校のちよつと変わった住所(福浜一六五番地)の先を利用し、そこに自分の「水曜日の物語」を書いた手紙を送ると誰かの水曜日の出来事が送られてくるという手紙によるコミュニケーションプロジェクトで三年間続けている。ディレクターとして映画監督の遠山昇司、声優の玉井夕海、加藤笑平、五十嵐靖晃と楠本管理人の五人

と住民スタッフで郵便局を運営。東京のFMラジオ局で一年間ラジオ番組も持った。メディアアートで活躍しているクワクポリヨウタ、写真を編集して作品化する下道基行、美術家の浅井裕介で「丁年目の消息」展というのも行った。この取り組みは、地域づくりということ。二〇一四年度の「グッドデザイン賞」になり、地元の漁師さんなど六本木の授賞式に行った。KADOKAWAから本も出る(赤崎水曜日郵便局)好評発売中、後期の「水曜日の消息」展が四月十七日まで開催中です。

二〇一四年からは「アーティスト・イン・レジデンスつなぎ」も行っている。町には空き家がたくさんあり、町民は「若もんが来てくれるとよかね」と言いながらトラブルを心配して空き家のまま、そこで美術館が借受けて作家を滞在させ制作してもらおう「空き家対策プロジェクト」ともいえる活動を始めた。月一回夜のワークショップを行うのが条件。その講師料金等が滞在時の生活費となる。初年は篠塚聖哉、翌年は武内明子。また、駅前整備プロジェクトとして浅井裕介による「アート・ロード・ミーティングつなぎの根っこ」も行った。



これまでの活動では、自分自身が学芸員であるだけでなく、いわば「地域文化コーディネーター」として、地域住民と作家とを結び役目をやって来た。住民の負担にならないような緩やかな結び目づくりであり、またメディアで取り上げられたり賞を頂いたりすると喜んでいただき、次へのモチベーションに繋がっている。住民参画型アートプロジェクトとしては、「芸術性、地域性、話題性」の三つのエレメントを重要だと思っているが、最近はこの「楽しさ」が大事だと気づいた。しかしプロジェクトの「位置づけ」は常にバランスを取るようになっている。またこのような活

動をやっていると、とても計画的に活動しているように思われがちだが、実は予想外の出来事の積み重ね。J・D・クラランボルツが言うように「キャリアの八割は、予想外の出来事や偶然の出会いによって決定される」というのは正しく、「コーディネーター的な立場で「出会い」と「出来事」を楽しみつつ行ってきた。

新しいプロジェクトは「西野達つなぎプロジェクト(仮称)」というもので、二〇一五年にイベント、次年度から本格始動の計画。西野氏は愛知県生まれの五五歳。一九九七年から主にヨーロッパで活動。ベルリンと東京を拠点に活動しているアーティスト。都市を舞台とした、多くの人々を巻き込む大胆で冒険的なプロジェクトを発表(シンガポールピエンナールではマリーライオンの実物を建物で囲ってしまい、間近で見学ができ夜はホテルの一角になるという「ザ・マリーライオンホテル」など)。西野さんは津奈木町にこれまで二回やってきて現場で色々なプランを考えている。楽しみにしてほしい。次に、藤田直哉の論考「前衛のゾンビたち―地域アートの



諸問題」を参考に「地域密着型アートプロジェクト」の問題点を考えてみたい。藤田によると「地域アート」は現代アートの中心的な活動の場となり、作品性より地域との関係性が正當化され批評性が無くなっている。現代アートを地域活性化に活用することでの国策として税金が使われ、極論すると「地域を活性化」するものこそ価値ある現代アートとなり、芸術性は曖昧となっている。「地域アート」は地方都市が都合のよい所だけ抜き出し自己肯定的に使っていて、本来芸術が持っている社会や政治を変える力が削がれていることにならないかという問題提起。津奈木町での課題を考えるとアートに関わる人は増えたが美術館の利用者は微増、プロジェクトにかかわるのはコミュニケーションを得意とする作家に偏りがちななどの課題が見える。今後は、色々な作家の展覧会をしていくべきだと思う。町に美術館があるという効果は若い世代には徐々に出てきている。また、町職員のAさんのように前例や規則に縛られず、より作品や作家の意図を大事にしようとする考えの人も出てきているなど今後期待できる。